

吹田操車場遺跡の調査

吹田操車場遺跡現地説明会資料1
財大阪府文化財調査研究センター
2000.08.26

今回の発掘調査について

吹田操車場遺跡は、昭和42年に行われた場内道・水路工事の際に、中世の土器が発見されたことによって遺跡として周知されてきました。しかし、その後本格的な調査は行われず、遺跡の実体はよくわかっていませんでした。

日本鉄道建設公団国鉄清算事業本部は、吹田信号場の基盤整備を行うにあたって大阪府教育委員会と遺跡の取り扱いについて協議を行いました。その結果、まず事業予定地全域において財団法人大阪府文化財調査研究センターが試掘調査を実施することになりました。

試掘調査は、操車場構内の約2.3km範囲に61箇所の調査区を設けて行いました。調査の結果、すべてのトレンチからたくさんの遺構・遺物が検出し、遺跡が操車場内に広く分布していることがわかりました。特に古墳時代後期の須恵器大甕を据えた遺構や、群集する土墳墓群、奈良時代から鎌倉時代にかけて営まれた集落などが発見されたことは、注目されます。これら試掘の結果を得た結果、場内の事業用地約4200㎡について、今回の発掘調査がおこなわれることになりました。

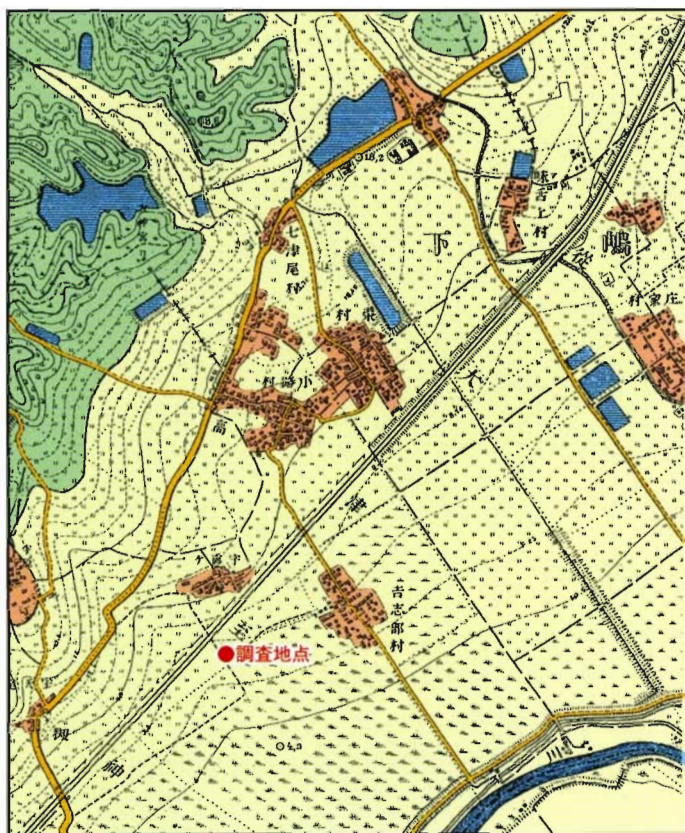
条里地割の初源を解明

今回の調査では、近代から古代にかけて4層の水田耕土を検出しました。現在残る道や地割等は、かつて一帯が耕地（水田）だった時のなごりです。耕地の地割は「条里地割」とよばれ、この付近では33度西にふった方向を軸とした基準線が早くから予想されていました。

今回、はじめてこの地割に沿ったあぜや水路をもつ水田が吹田市内で発見されました。また、この条里地割は耕土中に混じっていた遺物から10世紀頃にまでさかのぼることが明らかになりました。

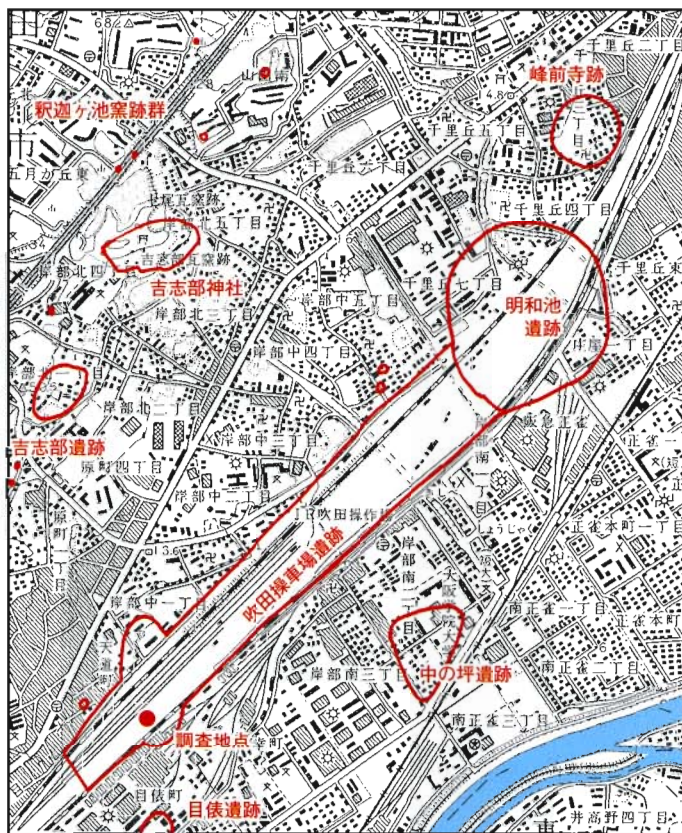
原野の開発過程を確認

さらに、この地点をはじめて人間が開拓した様子がわかりました。古墳時代前半頃、調査区の中央部分は湿地で水はけの悪い土地でした。この湿地を横断するように幅1～1.5m・深さ0.2～1.2mの溝が、直線的に掘られていました。溝は調査区を貫ぬいてのびています。おそらくこの溝は、排水と用水の機能を兼ねた当時の開発の基幹水路だったと思われます。また、この周辺には、古代人の足跡がくっきりと残っていました。



▲明治18年の地形図

操車場ができる以前は水田が広がっていました。



▲吹田操車場周辺の主な遺跡

試掘調査で遺跡の範囲が広がりました。

吹田操車場内で確認された遺構

江戸時代……………ほぼ全域で水田跡を確認。

室町時代……………試掘No.36で河川の堤らしき遺構を検出。遺物の出土は比較的少ない。

鎌倉時代……………試掘No.11～51までおよそ1.5kmにわたって遺物を確認。No.51付近では建物跡を、No.12～15では瓦を多く検出。近くに瓦用窯跡が存在？。

平安時代……………ほぼ全域で遺構・遺物を確認。No.51～58で建物跡を検出。No.13～28では条里方向の水田跡が良好に残存。

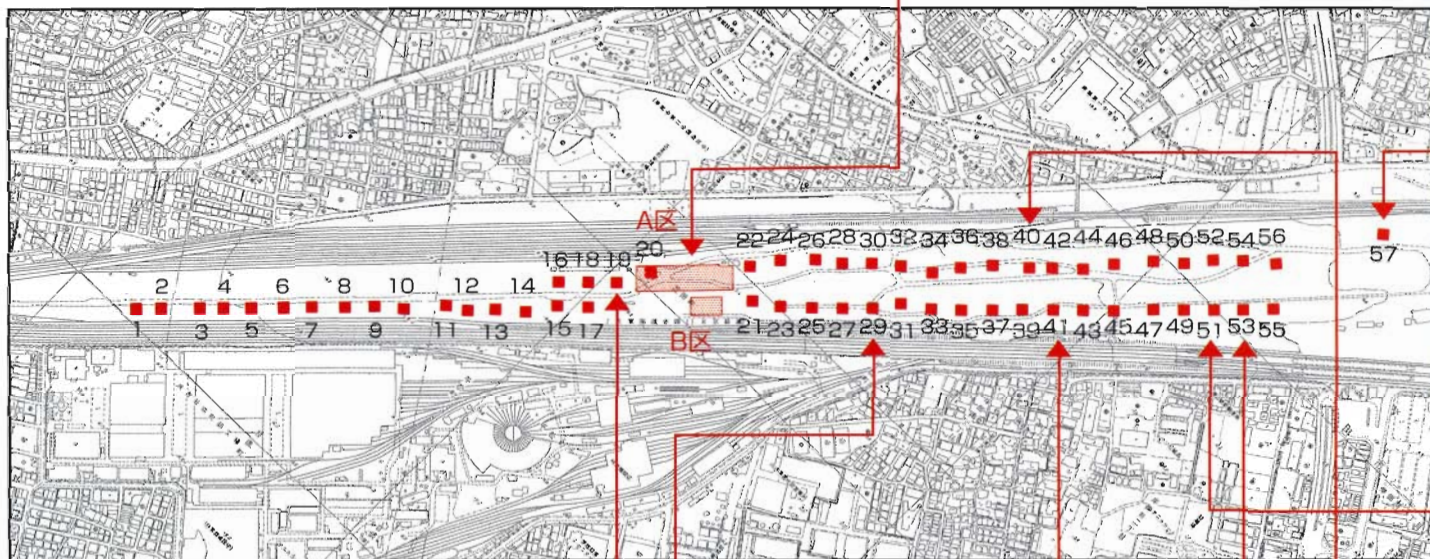
飛鳥・奈良時代……………試掘No.26～56で確認。No.48～56では建物跡や大溝を検出。No.51・53では飛鳥時代の土壘墓を検出。

古墳時代後期……………試掘No.23～57までおよそ2.5kmにわたって遺物を確認。試掘No.40で大甕を据えた土坑を検出。

古墳時代前期……………1 A区で溝を検出。試掘No.38では遺物のみ確認。



▲ 1 A区第3面（平安時代後期水田）
条里にそって格子状にあぜがみつかり



▲ 試掘No.19 溝 完掘状況（古代）



▲ 試掘No.41 井戸1 完掘状況（鎌倉時代後期）



▲ 試掘No.29 土師器羽釜出土状況（鎌倉時代）



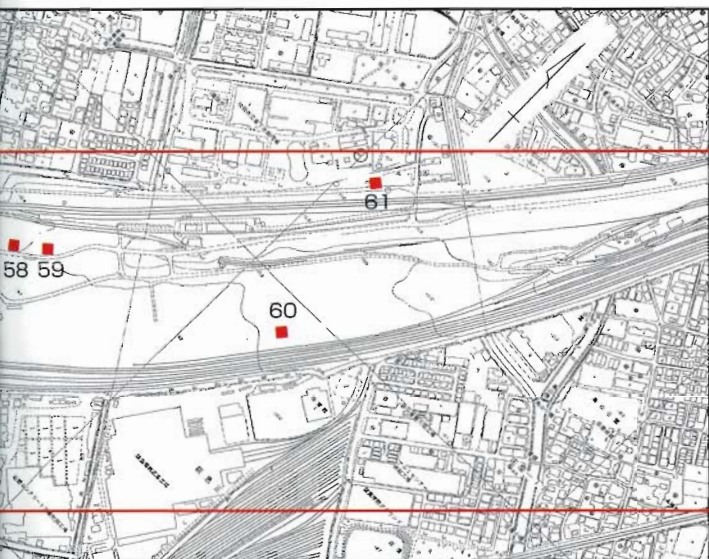
▲ 試掘No.40 須恵器大甕出土状況（古墳時代後期）



▲ 1 A区第4面（古墳時代後期）
 大小さまざまな溝や流路がありました。



▲ 1 A区5-1面（古墳時代前期）の溝



▲ 試掘No.57 土壇墓群（古墳時代後期）



▲ 試掘Mo.40 土坑から出土した須恵器大甕



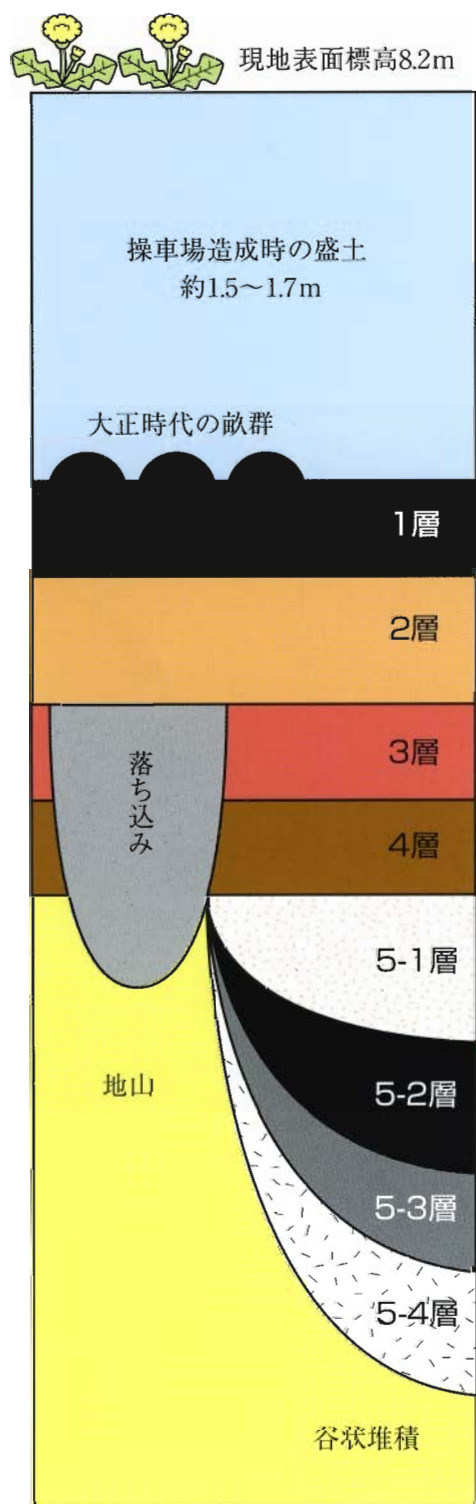
▲ 試掘No.51 土坑と柱穴（飛鳥～奈良）



▲ 試掘No.53 須恵器坏出土状況（飛鳥時代）

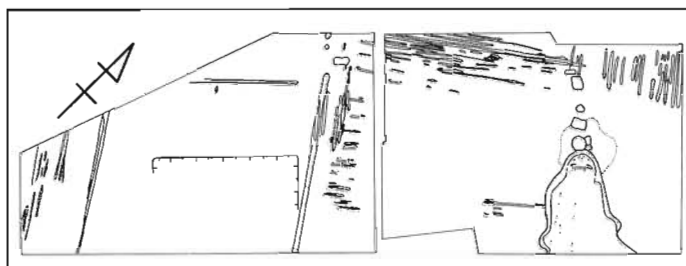
基本層序と1A区の遺構の変遷

- 盛土……操車場造成時に盛られた山砂
 第1層……黒灰色シルト（近代耕土）
 第2層……黄灰色砂質シルト（近世耕土）
 第3層……暗黄灰色粘土質シルト
 （中～近世水田耕土）
 第4層……褐灰色粗砂まじり粘土質シルト
 （古代水田耕土）
 第5-1層……灰白～明黄灰色粗砂～細砂
 （古墳時代後期洪水砂）
 第5-2層……黒褐色粘土
 （弥生時代後期？湿地堆積）



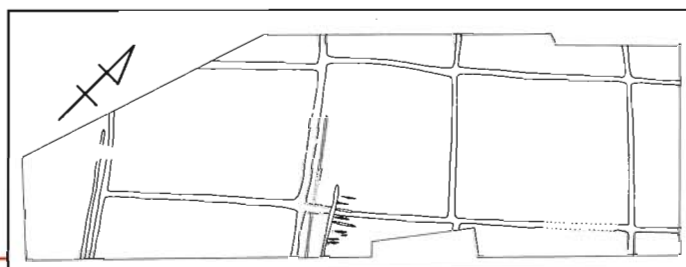
▲ 第1面（江戸末～明治時代の水田跡）

西端に坪境のあぜと杭列がならぶ。東半部では砂だまりと木杵を持つ井戸を検出。一面の鋤溝は条里方向。



▲ 第2面（鎌倉～江戸時代前半）

条里方向の用水路と鋤溝を検出。この後、洪水におそわれたため、人間や牛の足跡が良好に残る。



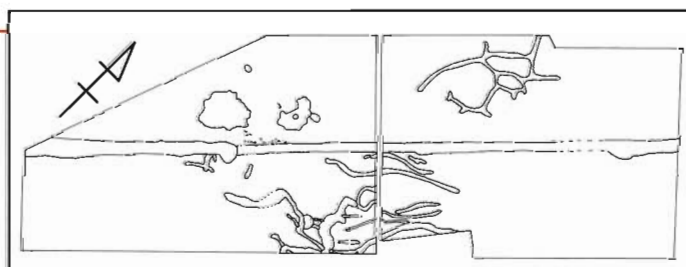
▲ 第3面（古代・10世紀頃）

縦横にのびるあぜとあぜに伴う杭列を検出。落ち込み付近では井戸を確認。1A区最古の条里遺構面。



▲ 第4面（古墳時代後期）

中央部分にのみ5-1層（砂が堆積）。排水のための水路が掘られている。東半部では耕作に伴う溝を検出。



▲ 第5-1面（古墳時代前期）

直線溝が掘られる。南半部では蛇行する溝が砂で埋っている。東西端の高い部分では建物があった可能性がある。